手触りと口当たりと安堵感と沁み込み感の遍歴から辿り着きし処

学校長　渡辺雅之

大学における（大学だけではないらしい）授業（講義）とはいかなるものか。昨今の風潮によれば、お客様（＝学生）に美味しく・食べやすく（＝難解さの対極としての分かり易く、分量も少なめで）、飽きさせずに（＝少ない知識量でも興味が湧くように）、次も食べてもらえるよう（＝資料を予め用意する）、授業料に見合うもの（商品を買うような）を提供することのようだ。お客様に考えてもらったりしてはいけない。お客様が知らないのは、習っていないからと理解すべし。何を食べれば単位がもらえ、卒業できるのかが重要なのだ。正解はすべてインターネット上にあり、早く選ぶ能力が試される。この場合の正解とは必ずしも真実ではなくとも、大多数側の思いと一致しているものらしい。こうした流れは、少子化ゆえの少ないパイの取り合いも一因らしい。

小職はもはや絶望の極に居るしかないのだが、内田　樹[1]は、この現状は教育を費用対効果の市場経済の常識から論じることにあるという。消費者マインドの子どもたちは、座して授業を受ける『「苦役」と「教育効果」を交換する』ので、『与える「苦役」を最小化し、受け取る「教育効果」を最大化すること』にのみ価値を見出すのである。また、諏訪哲二[2]は、昔の子どもたちのありようから論じる「共同体的」な社会と子どもの「個」から論じる「市民社会的」な社会との対比から、前者では教育を子どもたちへの「贈与」と考えるのに対し、後者では「商品交換」となると定義する。日本社会が前者から後者へ移行した結果、教育は商品交換すなわち等価交換されるべきものと相成ったと分析する。

そうこうしているうちに松浦寿輝の小論「かつて授業は『体験』であった」[3]に出会った。氏の学生時代の井上忠先生の講義（哲学史）を回想して、「何かとても大事な事柄が、他の誰にもできないような仕方で語られていることだけはわかる。」、「この人の発する言葉一つ一つの背後に、恐ろしいほどの知的労力と時間の蓄積が潜んでおり、膨大な文化的記憶の層が畳みこまれていることもわかる。」、「だが、哀しい哉、無知と無学のゆえに、わたしにはその内容を具体的に理解することができない。」、「本当に理解するには、結局、本を読まねばならないのだ。」、「沢山の、沢山の、沢山の本を読まねばならず、その道には終わりというものがない。わたしはそのことだけは戦慄的に理解した。」と書く。この授業が役に立ったのか？「何の役にも立たなかったその授業は、しかしわたしの人生に手渡された、本当にすばらしい、貴重このうえない贈り物であった。」とも書く。そうした授業に出た「体験」が重要なのだと説く松浦は、「畏怖も尊敬も、現在の大学からは消えてしまった。」、「教室は、小ぎれいにパッケージされた口当たりのよい知識を要領よく伝達する、能率的な教習会場如きものになりつつある。」と嘆くも、”Après moi le déluge.”　と。

アルジェリアでテロがあった（2013年1月）。その歴史的背景を探っているうちに鈴木道彦「越境の時 1960 年代と在日」[4]に出会った。その中には私の母校（都立小松川高校）での事件のことも触れてあった。そして、あの長編小説プルースト「失われた時を求めて」[5]の個人全訳を成し遂げた鈴木であった。プルーストはかつて何度か読破を試みたものの、第1巻で直ぐに挫折する始末（第1巻しか買っていないが）であった。その苦さ故に全13巻（1巻当たり平均500頁超）の読破なんぞ夢の又夢だろう、と思った。そんな時に古書店にて 8 冊もこれが眼前に現れたのだ。「買え！」と言われたかのよう。こんな偶然でプルースト再挑戦が始まった。そして、今度こそと順調に読み進み、第1巻が終わりに近づいてきたら、その巻末でのエッセイの著者がなんと松浦寿輝ではないか。「プルーストから吉田健一へ」[6]と題されていた。吉田健一とは誰ぞ。吉田　茂元首相の長男の意ではなく文人吉田健一のこと。吉田の「時間」[7]に触れながらエッセイのラストで「吉田健一は」プルーストの「『近代の完璧を求める方法』の内に胚胎されたシニシズムとニヒリズムの凄みに対しては十分に意識的ではなかったようにも思う。彼がジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』に冷淡であったことなども併せて思い起こされる。」と結んだ

ジョイスの「ユリシーズ」[8]が待っているところに、吉田健一が「フィネガンズ・ウェイク」に冷淡とはどういう意味だろうか。謎めいた暗号文のようだ。加えて、大江健三郎への武満徹の書簡[9]に「フィネ

ガンズ・ウェイク」に触発されたとあるではないか。何故だろう。柳瀬尚紀訳「フィネガンズ・ウェイク」[10] を入手してみると、冒頭

「川走、イブとアダム礼盃亭を過ぎ、く寝る岸辺から輪ん曲する湾へ、、今も度失せぬ巡り路を媚行し、巡り戻るは栄地四囲委蛇たるホウス城とその周円。」

とあった。なんなんだ、これは？元の英語はいかなるものかしらん。

蓮實重彦「反＝日本語論」[11] によって「アイルランド人ジェームズ・ジョイスにとっての英語は、二律背反的な愛憎の対象であった」ことを知った。そして、翻訳者である柳瀬の「日本語ほど面白いものはない」[12] を通じて柳瀬の翻訳への考え方を初めて理解することができた[13]。そして、柳瀬訳のロアルド・ダール「チョコレート工場の秘密」[14] ではそれを存分に味わうことができた。だが、フィネガンズ・ウェイクの方はまだ、だ。

ロラン・バルト「表徴の帝国」[15] に学ぶ。坪内祐三はバルトを「フランスの批評家（いや作家と言った方が正確かもしれない）」と記した[16]。だが、ここでも松浦寿輝[17] は、バルトは生前「『批評家』『記号学者』でこそあれ、『作家』などと見なされたためしがなかった」と記す。そして、「『失われた時を求めて』のような偉大な長編小説を書くことに憧れつつ、たぶん才能の欠如がその一つでないことだけは明らかないくつかの理由によって、作家になり損ねたバルト。その未決断のうちに窺われる『弱さ』の魅力を愛してきたわたしのような者にとっては」、結局バルトは「単に『記号』を愛した人、それもその意味をではなく、その手触りや色や匂いや味を身体的に愛した人だったのだと思う。」と綴る。

あるテーマを追って資料を狩猟するうちに松浦と出会い、次のテーマで深めるうちにまたもや松浦と出会い、松浦によって次のテーマに導かれていった。小職にとっては、松浦は水先案内人であるかもしれない。水先案内人を得て世界を深め、次の世界へとまた飛び立てるのも幸運であろう。巻頭言としては異色と言えるかもしれないが、いろいろな世界の手触り、口当たりを楽しみ、安堵したり、求めていたことが沁み込むのはうれしいことである。そんな遍歴を綴ってみることによって巻頭の栄誉に応えよう。

参考文献

1）内田　樹(2007)：「これを勉強することが何の役に立つんですか」に絶句する私　論座 2：66~72
2）諏訪哲二(2005)：オレ様化する子どもたち　中公新書ラクレ 171　Pp.238
3）松浦寿輝(2007)：かつて授業は「体験」であった　UP415：42~47
4）鈴木道彦(2007)：越境の時　1960 年代と在日　集英社新書 0378C　Pp.253
5）マルセル　プルースト（鈴木道彦訳）(2006)：失われた時を求めて　全 13 巻　集英社
6）松浦寿輝(2006)：プルーストから吉田健一へ　「失われた時を求めて」第 1 巻所収
7）吉田健一(1998)：時間　講談社文芸文庫　Pp.278
8）ジェームズ・ジョイス（丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳）(1996)：ユリシーズ Ⅰ～Ⅲ
9）大江健三郎(2010)：ジョイスと武満　図書 11：35
１０）ジェームズ・ジョイス（柳瀬尚紀訳）(1991・1993)：フィネガンズ・ウェイク　河出書房新社
１１）蓮實重彦(1986)：反＝日本語論　ちくま文庫 490　Pp.318
１２）柳瀬尚紀(2010)：日本語ほど面白いものはない　新潮社　Pp.191
１３）柳瀬尚紀×村上陽一郎(2007)：翻訳と教養をめぐる「怪物」対談　論座 9：216~227
１４）ロアルド・ダール（柳瀬尚紀訳）(2005)：チョコレート工場の秘密　評論社　Pp.269
１５）ロラン・バルト（宗左近訳）(1996)：表徴の帝国　ちくま学芸文庫 Pp.232
１６）坪内祐三(2005)：ロラン・バルト著作集の「現代社会の神話」は「神話作用」の完全訳だ　論座 5：324~327
１７）松浦寿輝(2004)：ロラン・バルトの現在　UP375:30~35